

# 一般教育における「総合基礎科目」の役割

永田 照子      小川 真理子

## I. はじめに

平成3年に大学設置基準の大綱化が文部省より通達され、一般教養課程の教育もかなり自由に考えられるようになった。

本学においてもこれを受けてカリキュラムの見直しが行われ、一般教養課程の人文科学・社会科学・自然科学の単位の枠がはずされたが、本学は秘書科という性質上、これまでの一般教養課程で培われるような幅広い教養、知識を持ち合わせていることは非常に大切である、という観点から、基礎・教養科目（これまでの一般教育科目に当たる）に、一つのテーマのもと、それに対して人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの視点で論ずる科目、すなわち「総合基礎科目」が設置された。

総合基礎科目は平成5年度より始められ、初年度のみ一人の講師による講義であったが、次年度からはそれぞれの専門分野の講師によるオムニバスの講義となっている。

学生個人にとってあまり得手でない分野でも、一つのテーマのもとでわかりやすい身近な事例から問題に接近する講義を受講することは、苦手だと思いこんでいた領域に興味・関心を持つという意味で意義深いのではないかと思われる。と同時にひとつの問題に対して種々の分野からの研究が可能であることも理解することができるのではないかと期待される。

5年目を迎えた今年度、総合基礎科目の成果と役割、今後の問題などを考察する目的で受講生の意識・態度の変化などについて調査を実施した。

その調査の結果を中心に受講生のレポートなども参考にして検討したい。

## II. 昨年までの総合基礎科目の概要

1年次生前期の講義科目であるが、初年度より受講生は非常に多く、ほとんどの1年次生が受講しているといってもよい状態である。

＊平成5年度（初年度）

テーマ：『環境問題－生活の中から考える』

この年は一人の講師が担当したが、講義内容は環境生態学、環境政治経済学からのアプローチで、生活の中から問題を具体的に捉え直し、環境破壊の社会構造を明らかにし、そこから環境保全と調和する生活、自然と共生できる生活とは何か、を考えるものであった。

＊平成6年度

テーマ：『家族を考える』

この年は国連の定めた国際家族年に当たっていたこともあり、このテーマとした。さらにこの年より、各専門分野の講師がそれぞれ1回講義を担当し、本学の専任教員の他、学外からも講師を招いて実施した。講義の後には必ず質問の時間を設けた。期末にはレポート（テーマに関連する問題を一つ取り上げ、論ずる）の提出を求めた。

各回の題：「婚姻、家族の人権などの問題」

「誕生前後の赤ちゃんの素晴らしい能力」

「現代の子育て」

「社会福祉における扶養の範囲」

「親子関係の問題」

「住居環境と家族」

「児童虐待の諸問題」

「インドにおける家族形態」

「ホスピスにおける患者と家族のQOL」

（後日、希望者によるホスピスの見学実施）

「インディアンの家族形態の歴史」

「家計について」

なお、初回にはオリエンテーション、最終回はまとめを行った。

＊平成7年度

テーマ：『女性の生き方をめぐって』

前年のテーマのつづきとして家族の中の一人の女性としての生き方をさまざまな観点から考えてみることにした。

各回の題：「女性史」

「外国文学の中の女性たち」

「日本文学の中の女性たち」

「女性と企業」(1)

「女性と法律」  
「恋愛における性差」  
「女性と服装史」  
「女性と企業」(2) 本学第1期卒業生の話  
「動物行動学における雌雄」  
「女性と健康」

初回にはオリエンテーション、最終回にはまとめを行った。

この年から毎回ごとに簡単な講義レポート（講義に対する感想・意見・質問など）を提出させた。この意図は講義をしっかりと聴くこととレポートを書くことによって講義内容を自分の言葉でまとめ、問題を考える力を身につけることが可能であると考えられたからである。さらに期末には前年と同様のレポートの提出を求めた。

**\*平成8年度**

テーマ：『21世紀を生きる』

21世紀を間近に控え、21世紀をどのように生きるべきかを幅広い観点から考えてみる目的で選ばれた。

各回の題：「国際社会の意味するところ」

「女性の活躍」：海外で活躍中の女性による講義

「21世紀の政治経済」

「日本の自然・世界の自然」：写真家の目から

「日本人の自然観」

「環境とリサイクル」

「企業の社会責任」

「自然を愛する」

「身近な情報社会」

「女と男のつきあい方」

「仕事とレジャー」

初回にはオリエンテーション、最終回にはまとめを行った。

各回ごとの講義レポートの提出は前年と同様であるが、この年から期末のレポートには選んだ問題について関連のある本を読んで講義と関連づけ、自分の考えを論述するものとした。

### III. 平成9年度における総合基礎科目について

本年度実施されたテーマは昨年度と同じであったが、今年度の特色として

本学所在地の厚木市の市民参加の公開授業としたことである。29名の参加が得られた（希望者はもっと多数であったが教室の大きさからの制限があった）。市民参加の意義については後述する。

テーマ：『21世紀を生きる』

各回の題：「学問のススメ」：短大で何をいかに学ぶか

「あなた、結婚しますか？－これからの家庭をめぐって－」

「身近な自然を楽しむ」

「肌の栄養と美容」

「生活の中の国際化」：日本でのオーストラリアからのホームステイの留学生の話を中心に

「トットちゃんが出会った子供たち」：写真家の目を通して

「今、アジアで」：ベトナムの“子どもの家”の子供たち

「仕事に生かすインターネット」

「女性の活躍」：キャリア・ウーマンとしての活躍

「身近な情報社会」：コンピュータ・グラフィックなど

「災害と心理」：阪神淡路大震災の体験から

初回にはオリエンテーション、最終回にはまとめを行った。

各回ごとの講義レポートと期末のレポートの提出は昨年と同様であった。

なお、今年度の学生の受講者数は319名であった。

#### IV. 総合基礎科目「21世紀を生きる」における調査について

調査は、本科目の受講生を対象に受講前と受講後の2回、アンケート方式で行った。なお、社会人の受講者には別途受講後にアンケートを実施した。

##### 1. 受講前の意識調査

調査項目は、21世紀に対して持っている全体的なイメージと21世紀について持っている不安、希望、さらに環境問題、社会問題について持っている関心事、情報社会で興味を持っているもの、不慮の災害（大地震など）に対して各家庭で備えているもの、20年後の生活を想像して自由記述する、などであった。

##### 2. 受講後の調査

調査項目は今期の総合基礎科目のシリーズで関心をもった問題、受講後の認識・態度の変化、21世紀を生きるにあたっての現在の気持、社会人参加について、などであった。

### 3. 社会人の受講者へのアンケート調査

このシリーズで関心を持ったテーマ，受講後の感想，学生の態度，などであった。

## V. 調査の結果

### 1. 受講前の意識調査について

1) 21世紀を色で表すと何色かについては表1に示されている。

受講前はブルー，白，緑，の順であった。色がいかなる意味合いをもつかは明白ではないが，この3色の色からは未来はバラ色ではないが，必ずしも暗くはないということであろうか。この質問は受講後にも設けられたので，表1にまとめて示されている。

2) 21世紀について不安に思っていることは表2に示されている（複数回答3つまで可）。環境破壊がずば抜けて多く，つづいて地震・災害である。か

表1 21世紀を色であらわすとすれば何色でしょう(%)

色	受講前	受講後
ブルー	30.6	18.2
白	28.5	36.4
緑	10.6	8.2
グレー	9.4	16.1
黄色	9.4	11.1
ピンク	7.7	6.8
赤	3.0	1.8
紫	0.9	1.4

表2 21世紀への不安（3つまで回答）

環境破壊	205
地震・災害	157
経済の行き詰まり	77
エネルギー不足	62
社会保障の先細り	46
エイズ	43
戦争	40
延べ回答数	630

なり値は低くなるが、経済の行き詰まり、エネルギー不足と続く。

3) 21世紀について持っている希望について（複数回答3つまで可）の結果は（表3）、1位は環境の整備であり、前記の環境破壊への不安の打ち消しをここの中で求めているのかもしれない。生活の豊かさ、国際交流の発展、

表3 21世紀への希望（3つまで回答）

環境整備	124
生活の豊かさ	104
国際交流の発展	86
女性の地位向上	84
宇宙への進出	77
科学技術の発展	76
開発途上国の発展	43
延べ回答数	594

表4 環境問題への関心（3つまで回答）

空気・水の汚染	138
オゾン層の破壊	131
地球の温暖化	113
リサイクル	97
身近な自然の消滅	83
動物の絶滅	66
熱帯雨林の破壊	28
延べ回答数	656

表5 社会問題への関心（3つまで回答）

景気	122
ファッション	115
少子化現象	88
難民	65
異文化交流	41
ホームレス	39
経済摩擦	28
セクハラ	28
延べ回答数	526

女性の地位の向上の順となっている。

4) 環境問題で関心を持っていることは(複数回答3つまで可)、空気・水の汚染、オゾン層の破壊、地球の温暖化でいずれもマス・コミでよく取り上げられている問題である(表4)。身近な、人類存続に直接関わることに関心が向けられている。

5) 社会問題では(複数回答3つまで可)、景気、ファッション、少子化現象である(表5)。景気の問題が1位であるのは、消費税の5%へのアップが学生たちの関心をそれに向けさせているのかもしれない。

6) 今後の情報社会で興味を持っているものは(複数回答可)、インターネットが最も多く、次いでパソコン通信、と現代社会の情勢をそのまま反映したものとなっている(表6)。本学では1年次よりこれらに関わる授業を実施していることも関係しているであろう。

7) 不慮の災害に対して備えていることとして(複数回答可)は、懐中電灯、食糧の常備、つづいてラジオ、水の確保で、家族の集合場所を決めるは

表6 情報社会での関心事(複数回答)

インターネット	228
パソコン通信	157
絵・グラフィック	43
作曲・演奏	35
動画・アニメなど	33
電子出版	27
延べ回答数	523

表7 災害への備え(複数回答)

懐中電灯	177
食料の常備	110
ラジオ	88
水の確保	80
家族の集合場所	59
常備薬	54
耐震設備	17
その他の地震対策	11
延べ回答数	596

意外に多くなかった（表 7）。

その他の質問についてはここでの報告は割愛する。

以上は今年度のテーマと関連することがらについて、あらかじめいかなる知識・態度を有しているかを調べるために実施したものであった。

## 2. 受講後の調査について

1) 受講後の 21 世紀の色による表現は(表 1), 白, ブルー, グレーの順で,

表 8 総合基礎で関心のあったテーマ (%)

あなた, 結婚しますか?	34.6
今, アジアで	22.4
災害と心理	9.8
女性の活躍	8.4
生活の中の国際化	7.0
トットちゃんを見た子供たち	5.2
身近な情報社会	3.5
肌の栄養と美容	3.1
学問のススメ	2.1
インターネットを仕事に生かす	2.1
身近な自然を楽しむ	1.7

表 9 受講後の認識・態度の変化—加重平均値\*

災害について	4.19
世界の子供たちについて	4.15
ボランティアのあり方	3.97
国際文流について	3.74
インターネットについて	3.47
短大における学び方	3.46
女性の自立	3.33
コンピュータ・グラフィックなど	3.23
結婚に対する考え方	3.18
肌の栄養と美容	3.18
家庭のあり方	3.12
自熱の楽しみ方	3.11

※変わらない 1 点, あまり変わらない 2 点, どちらともいえない 3 点, 少し変わった 4 点, 変わった 5 点



圧倒的に白が多く (36.4%), また, 3 位にグレーとなっている。

ブルー・白・緑から, 白・ブルー・グレーへの変化については何を意味するのか, 21 世紀の生き方は不安は増すもののますます予測がつかない, あるいは多様でわからないということなのだろうか。

2) 今年度のシリーズで最も関心を持った問題については表 8 に示されている (回答はひとつのみ)。

「あなた, 結婚しますか」が最も多く, 次いで「今, アジアで」であり, かなり離れて「災害と心理」であった。女子短大生にとっては,それほど遠くはない結婚についての関心は高く, また講義の内容も伝統的な結婚の形態への問題の提起, アダルト・チルドレンの問題などが話され, 学生にとっても刺激的であったと思われる。また, 「今, アジアで」は, 現在, 子どもの家にいるベトナムの女子高校生が話に加わってもらったことも関心を一層かきたてたかと思われる。「災害と心理」は東海大地震も近いかもしれないといわれている現在, 阪神淡路大地震の体験者である社会心理学者の講義は受講者に関心を引き起こさせたのであろう。

3) このシリーズを受講後の認識・態度の変化については, 12 項目について, 「変わらない」から「変わった」まで, 5 段階評価と, 同時に簡単な理由の記述を求めた。その結果は図 1-1 から図 1-12 に示されている。

12 項目についての全体的な変化をみるため, それぞれの値を独立と見做すには疑義があるが, 大まかな傾向をみるために仮に独立と見做し,  $12 \times 5$  のマトリックスによる尤度比検定を行った。図 1 において, 上向きの矢印 (↑) 2 つは 1% の有意水準で 1 つは 5% の有意水準で他の項目との比較においてその項目を選択した者の比率が高いことを示し, 下向きの矢印 (↓) はそれぞれその項目を選択した者の比率が低いことを示している。また, 5 段階評価について「変わらない」1 点, 「あまり変わらない」2 点, 「どちらともいえない」3 点, 「少し変わった」4 点, 「変わった」5 点として加重平均値を算出したのが表 9 である。

図 1 に示された尤度比検定の結果と表 9 の加重平均値から, 変化の大きいものとしては, 災害と心理, 世界の子供たち, ボランティアのあり方, つづいて国際交流の項目であることがわかる。

また, パソコンに関わるもの, すなわち, インターネットやコンピュータ・グラフィックは授業のなかにすでに組み入れられていて, ある程度の理解は得られているが, 災害やそれに関わるボランティアのあり方についての話は受講生にとってはこれまで経験の少ないことだけに変化の大きいものであっ

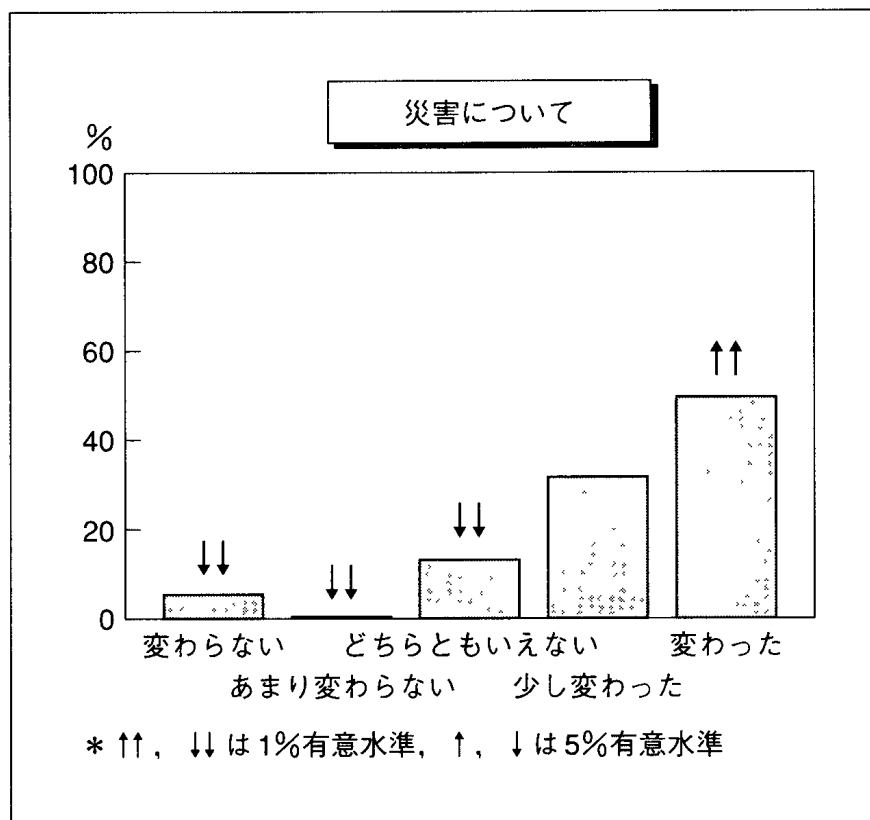


図 1-1

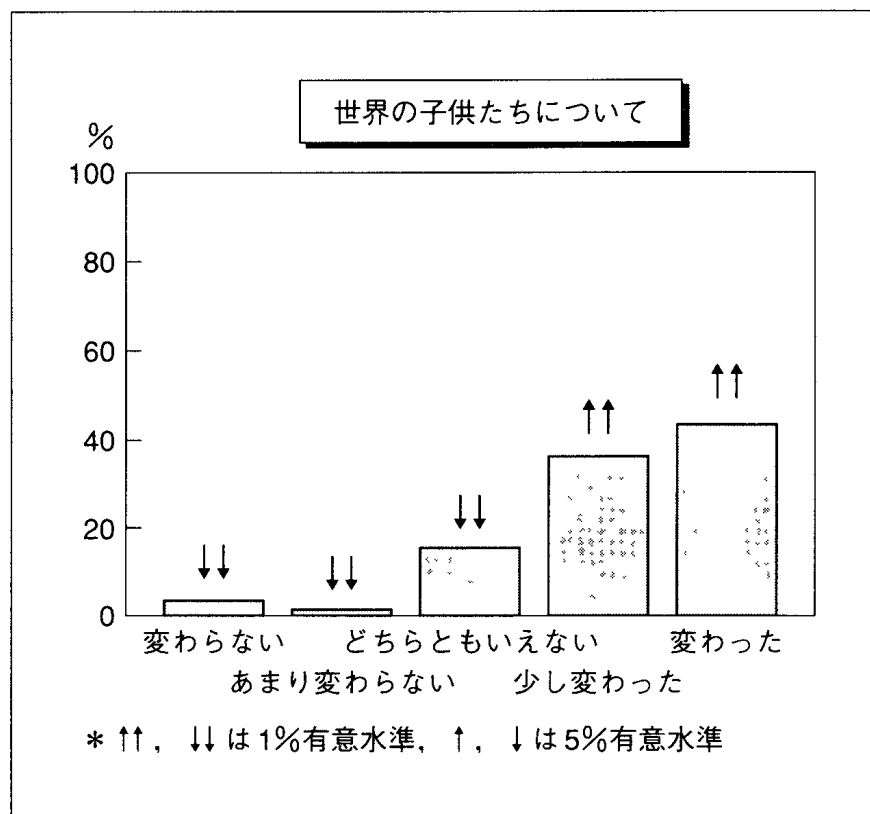


図 1-2

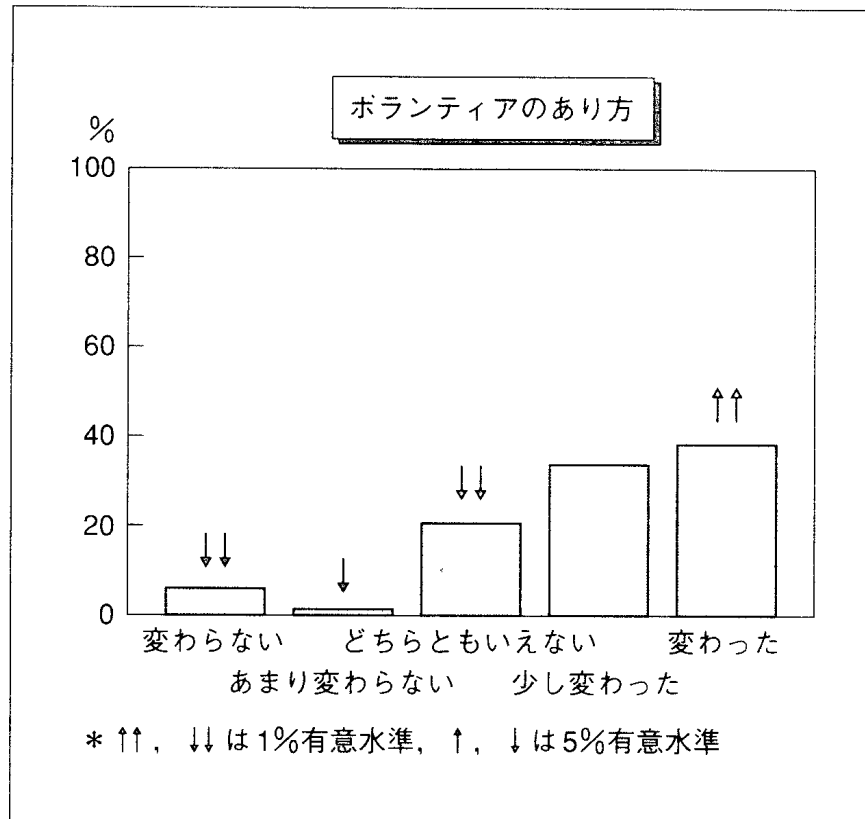


図 1-3

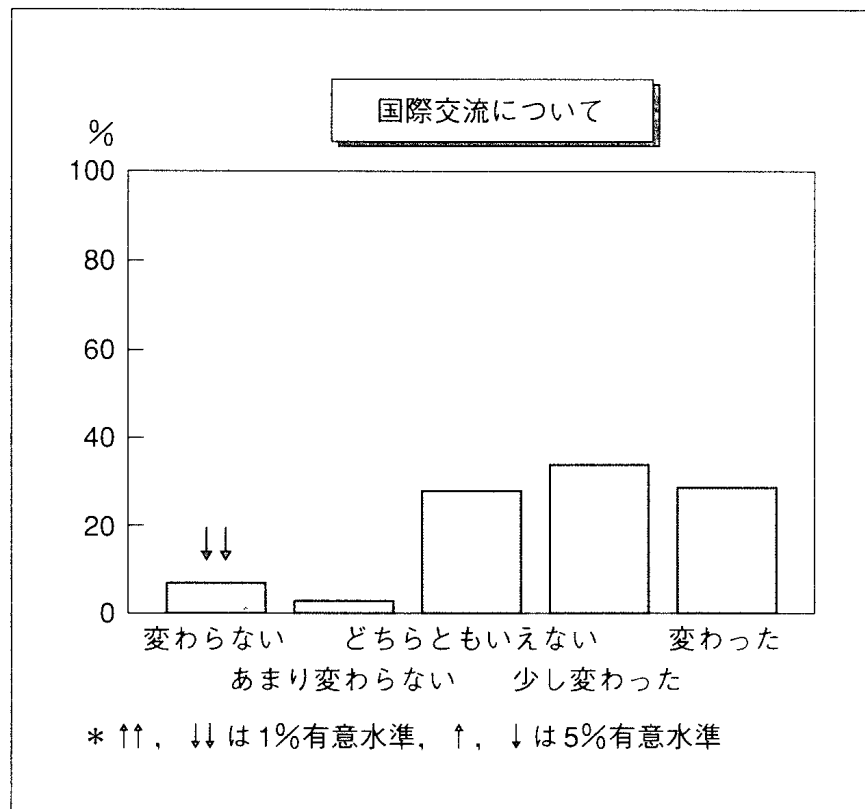


図 1-4

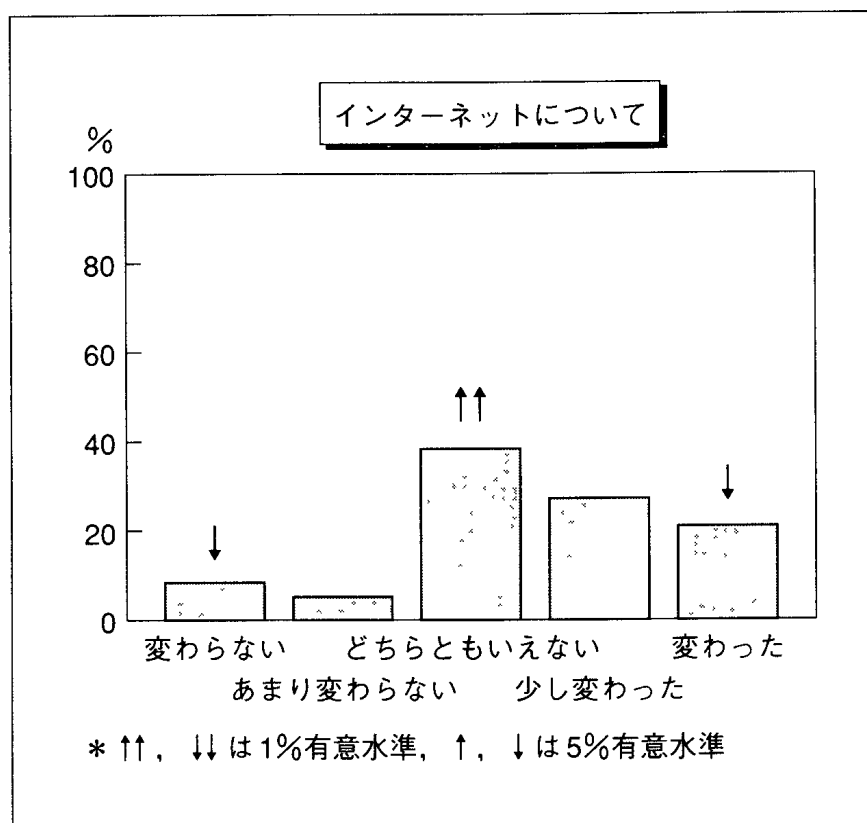


図 1-5

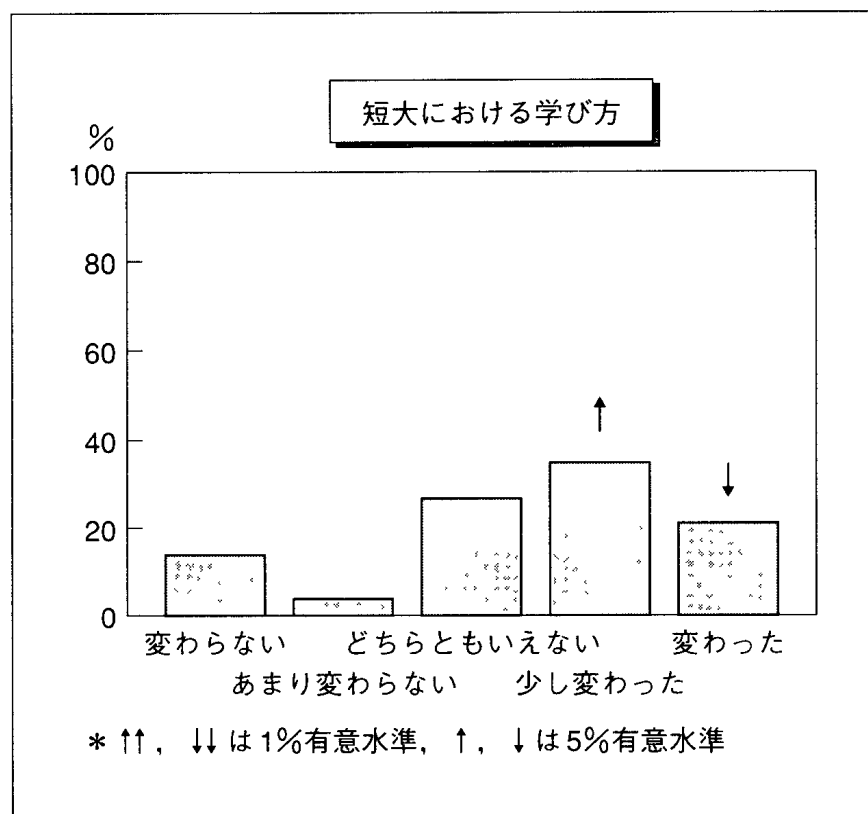


図 1-6

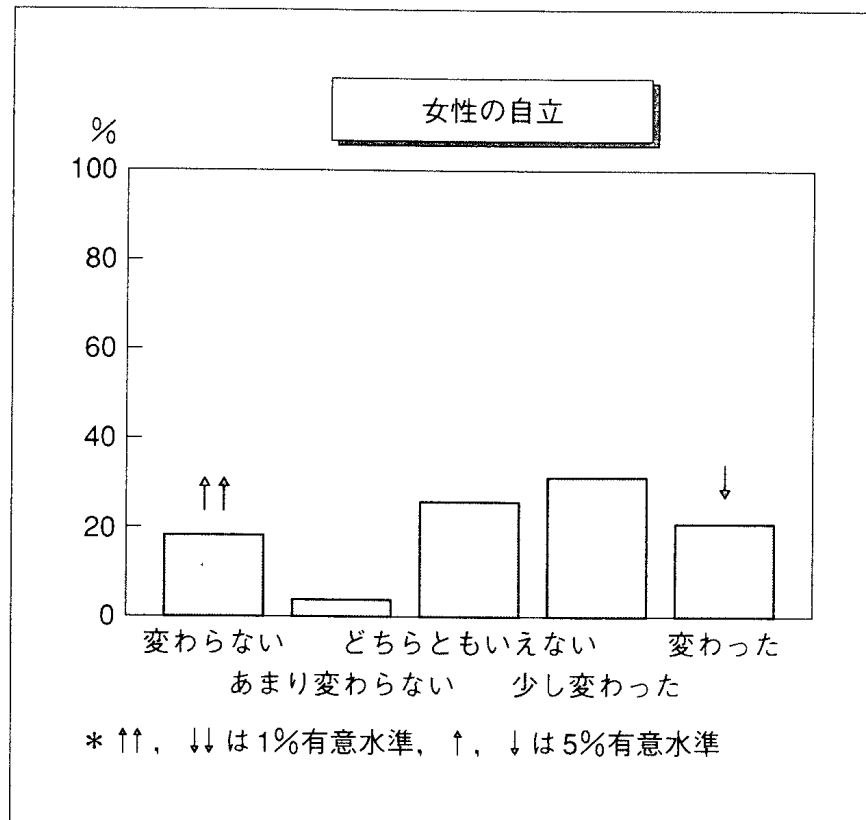


図 1-7

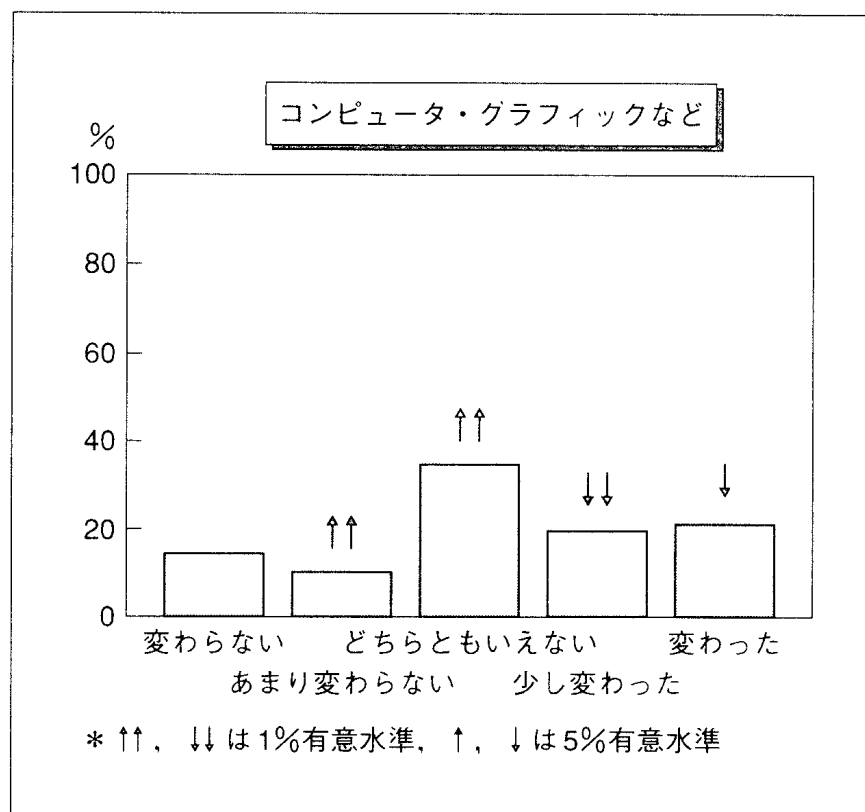


図 1-8

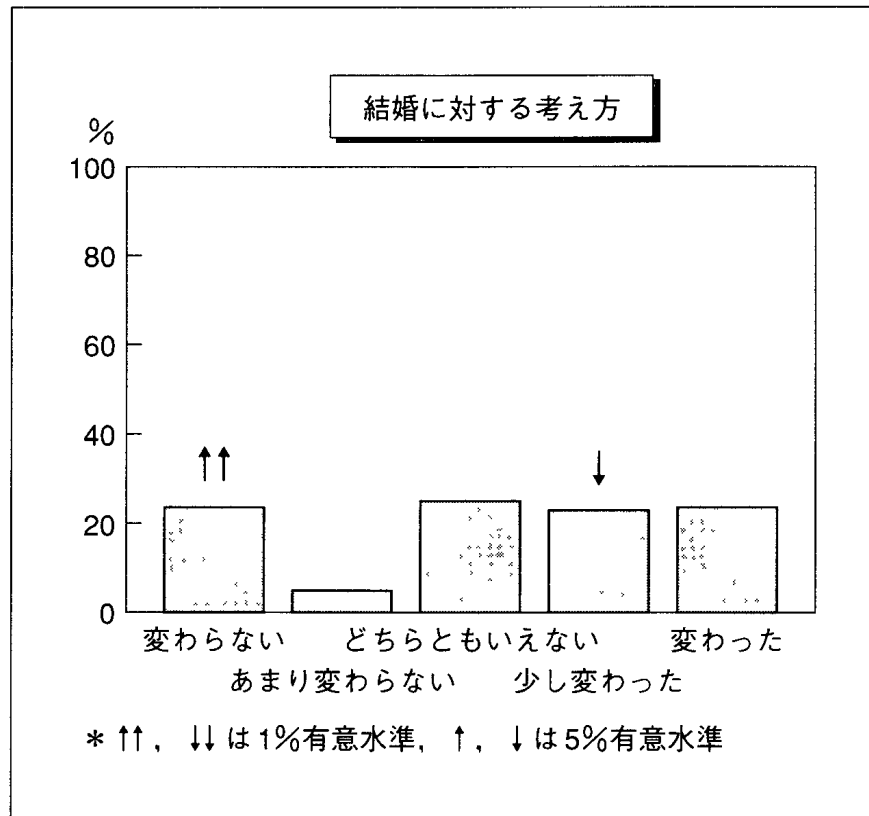


図 1-9

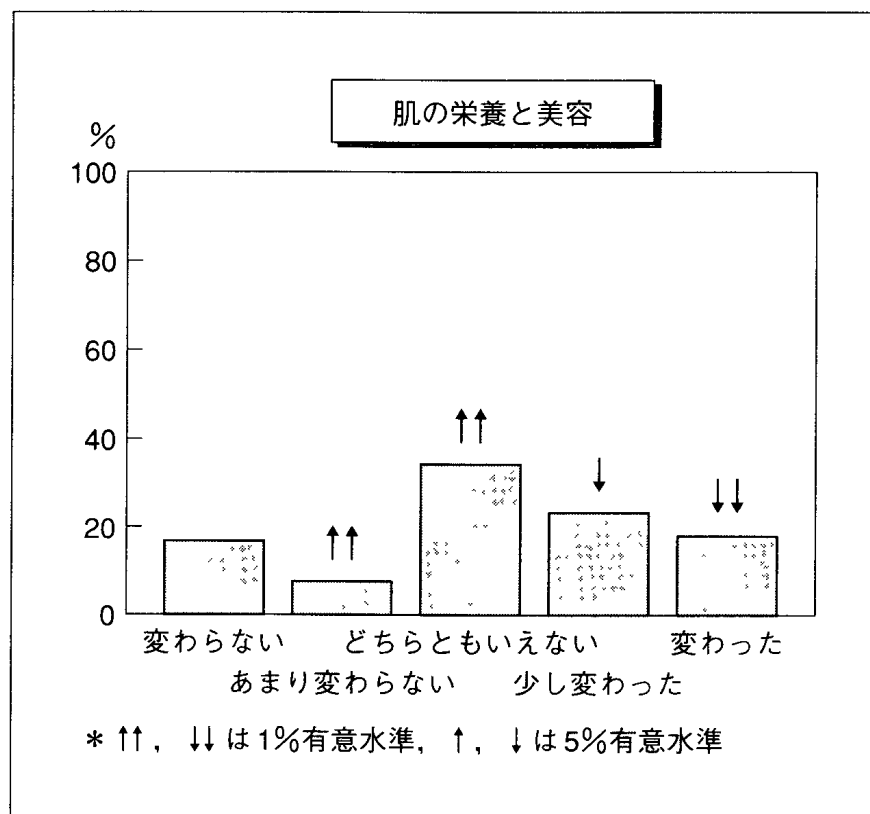


図 1-10

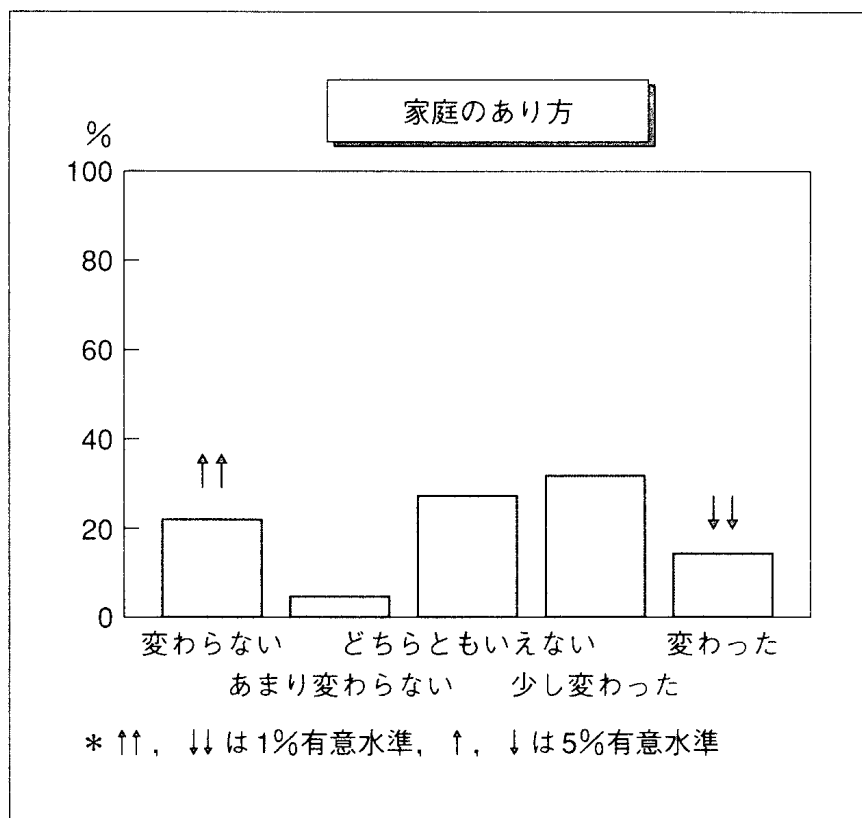


図 1-11

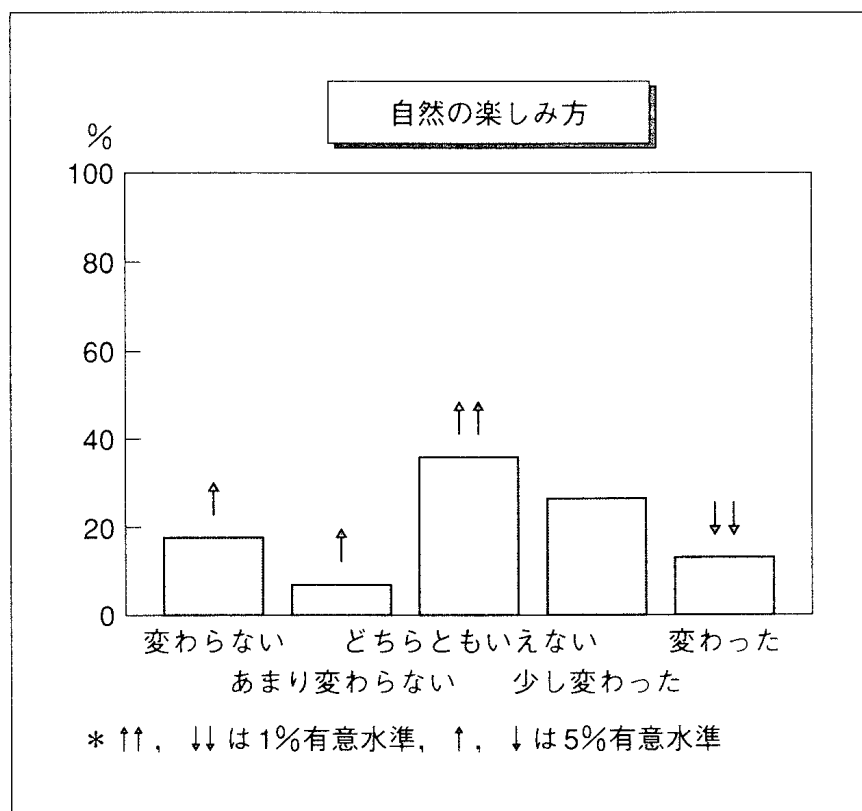


図 1-12

たのであろう。ベトナムの子供たちの話や写真による世界の子供たちについての生々しい情報などは普段直接接する機会の少ないことだけに非常に学生の認識・態度を変化させたといえる。日本への留学生の話は留学生たちがどのように日本に適応しようとしているか、日本人をどのように見ているかについての認識をあらたにしたようである。

結婚に対する考え方や家庭のあり方については関心は大いにあるが、態度の変化にまでは繋がらないということであろうか。

4) 21世紀を生きるにあたっての現在の気持では(表10)、今後あまり変わらず(37.9%), 何とかかなりそう(31.4%)の回答で70%近くが占められた。何もわからず不安というのも20%あった。この回答は、21世紀を色で表したもの(白を変化なしと解釈すると)、すなわち白、ブルー、グレーの順と符合するところがある。

5) 現代社会で一番重要だと考えられていることは(表11)、環境の整備が群れを抜いて多く、国際政治的な問題(民族紛争、難民)、家庭のあり方の順であった。21世紀を生きて行くために、まずは、環境を整備することが急務ということなのであろう。今回のシリーズでも講義のなかに環境の問題はしばしば登場しており(身近な自然を楽しむ、肌の栄養と美容など)、受講前の不安事項として環境の破壊を挙げ、希望事項として環境の整備を挙げている

表10 21世紀を生きる気持

今のまま続く	37.9%
まあまあ、なんとかかなりそう	31.4%
なにもわからず不安	19.3%
21世紀は暗そう	6.6%
自信がついた	4.1%
かえって混乱した	0.7%

表11 現代社会での重要なこと

環境整備	45.2%
国際政治問題の解決	21.9%
家庭のあり方	14.1%
経済の動向	8.1%
情報化社会	7.4%
異文化交流	3.2%



ことと一致する。また、国際政治的な問題は、ベトナムの子供たちでのストリート・チルドレンの話や世界の子どもの写真が受講生の態度の変化を引き起こし重要問題として認識されたものと考えられる。

今後の取り上げて欲しいテーマについては、記述が多くはなかったが、環境の問題が多く挙げられており、次に結婚に関するものであった。

社会人の参加については、肯定的意見（世代の違う人の質問・意見が聞ける、緊張感が出る）が圧倒的であった。

### 3. 社会人の受講者へのアンケート調査について

最終講義の1週間後に実施された社会人の受講者との懇談会時でのアンケート調査であったので、回答数が少なかったが(14名)、「生活の中の国際化」、「学問のススメ」に関心があった。社会人のほとんどが中高年の女性であったこともあり、留学生の受け入れ、子息の留学の問題に関心があったようだ。また、過去に進学できなかったがこの機会に大学の雰囲気味わう、学ぶということについての関心が「学問のススメ」への関心となったと考えられる。

懇談会でのその他の感想でも、社会人のみの授業より、若い人と一緒に授業に参加することで学生気分になることができたという喜びの声が聞かれた。また、一般教養ということで幅広く楽しく入っていったという声もあった。

### 4. その他

期末のレポートのテーマとしては結婚について、子育てに関連したものが最も多く、結婚と女性の活躍を関連づけてテーマとしている場合もあった。今、アジアでとットちゃんが出会った子供たちについてをまとめたもの、災害と心理の順であった。環境の問題は重要であるという認識はあるもののレポートとしてとりあげるのは困難であったのかもしれない。

## VI. 考 察

上記の結果を総合して総合基礎科目のあり方、今後の問題を検討してみたい。

1) 「21世紀を生きる」というテーマを設定したのは、身近な問題であること、幅広いテーマであり21世紀の生き方を考えるのにはいろいろの観点、すなわち、人文科学的・社会科学的・自然科学的な観点からの考察が可能であり、これは総合基礎科目の目的にも添ったものであること、などが理由であった。この点については、ある程度達成されたと考えられる。毎回提出される講義レポートから、受講生がどの分野の講義についても真面目に取り組ん

でいたことがうかがえる。

2) 現代の学生は、一般的に消極的で受け身的であり、勉学のみならず、自治会の活動やクラブ活動においても積極的に参加しないと言われている。事実、本学の学生の意識調査(1996年12月～1997年1月)<sup>1)</sup>においても、前回の調査(1993年12月～1994年1月)と比較して「卒業の単位さえそろえば、成績はどうでもよい」が増え、クラブ活動の参加者も減少している。このような学生たちにいかに勉学の意欲・関心をもたせるか、消極的だ、受け身的だとばかりいっていないで、どうすれば学問に関心を持たせることができるか、意欲を培わせることができるかを考えなければならない。新村<sup>2)</sup>は、「知識や学習への意欲・関心・理解力・わかる力を発展させる教授＝学習のシステムは、「生」・「現実」・「人格」・「人間性」が鍵的概念であり、「生きること(力)」と「わかること(力)」との結合に本質的ポイントがある」と、学生へのアンケート調査から述べている。このような観点からも、総合基礎科目を1年次の前期に設けることは、意義深いと考えられる。毎回、異なる講義を聞いて良かった、通年の講義にして欲しいという声もきかれ、全般的には好評であった。

今回、初回に「学問のススメ」と題して短大における学び方の講義を置いたことも良かったと感じている。変化の大きさは他と比べて大きくはないが、「変わった」というより「知った」という意味合いがあるようである。理由の記述に、短大の授業では積極的にならなければならない、高校時代とは違うのだ、などの意見がみられた。

3) 社会人の参加は今回非常に成功したと思われる。社会人の受講者にとっても、短大の受講生にとっても得るものが多かったと考えられる。

4) 今後、検討すべきこととして、講義の進め方がある。

オリエンテーションを緻密にして各回の題の紹介を詳しくし、事前の興味をもっと持たせるようにすること、質問の時間をたっぷりと取れるように工夫して受講生が一層積極的に参加できるようにすること、他の科目との関連づけをしっかりと行ない、後の授業の興味を増大させるようにすること、などである。時間的余裕がなくて見学の機会をつくることができなかったが、可能な限り、実現させることも重要である。

## VII. おわりに

どのようなテーマを設定するか、どのような方を講師に迎えるかが、総合基礎科目の成否に大きく関わってくると考えられる。

今年度の講師の方々にここでお礼を述べるとともに、積極的に参加してくださった厚木の市民の方々にも感謝の意を表したいと思う。

#### 参考文献

- 1) 東京工芸大学女子短期大学部学生委員会「学生生活に関する調査，調査結果の概要（1996 年度）」1997 年
- 2) 新村洋史「学生の学習観・教養観とその変革の条件——青年期の自己形成と教養観のあり方——」，一般教育学会誌，第 18 巻第 2 号，pp. 61～64，1996 年